

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 22 日現在

機関番号：22701

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530823

研究課題名(和文) 他者の多様性への寛容：児童と青年における発達の意味と教育の可能性の検討

研究課題名(英文) Tolerance for diversity: Examination of the developmental meaning and the possibility of education

研究代表者

長谷川 真里 (Hasegawa, Mari)

横浜市立大学・都市社会文化研究科・教授

研究者番号：10376973

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円、(間接経費) 660,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、第1に他者持つ異論に対する寛容性を規定する要因を探ること、第2に、寛容性が持つ心理的意味を考察することである。幼児、児童、青年を対象とした実験から、寛容性は相対主義の理解の発達と独立した発達過程であること、加齢とともに道徳領域の問題が重視されるようになることが示唆された。また、「意見の異なる他者に対する寛容性」が対人ネットワークの拡大に影響することが示された。以上の知見をもとに、寛容性の発達の意味と教育的示唆を議論した。

研究成果の概要(英文)：This study investigated factors that determine tolerance towards others' having different opinions and discussed psychological meaning of tolerance. Experiments were conducted with infants, children, and young people. The results suggested that tolerance was a developmental process that is independent of development regarding the understanding of relativism. Moreover, results indicated that issues in the moral domain come to be valued with age. Furthermore, it was indicated that "tolerance towards others with different opinions" affected the expansion of interpersonal networks. Based on the above findings, the developmental meanings of tolerance are discussed and suggestions for the field of education are presented.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会心理学

キーワード：寛容性 社会的判断 集団排除 道徳性の発達 仲間関係 相対主義の理解 対人ネットワーク 社会的領域理論

1. 研究開始当初の背景

人が異質な他者を受容するというとはどのような意味があるのか。幼児においては、自分と異なる嗜好や思考を持つ他者を理解することは難しい。児童期、青年期になり、他者理解が発達するものの、依然自分と異なる意見を持つ他者の視点に立つことは困難である。しかし、異質な他者の受容とは、他者の異質性の理解に限らない。他者の多様性に対する「寛容(tolerance)」の問題と位置づけることができる。「寛容」はこれまで、政治的、宗教的な問題として扱われることが多かったが、子どもの日常生活にもかかわる問題である。たとえば、自分と異なる意見を持つ他者を「認めること」、あるいは、自分たちの集団に「受け入れること」などは、まさしく「寛容」のひとつの側面である。このような、自分とは異なる信念を持つ他者を受け入れる態度は、学校現場でも大きな問題となっている。その一方で、思春期に特有の、異質な他者を排除しようとする心理特性は、成長のために必要な一つの過程であるという指摘もある。そこで、本研究は、自分とは異なる信念を持つ他者に対する判断の発達を探り、それが人間にとってどのような心理的意味を持つものなのかを探る。

2. 研究の目的

本研究の目的は、第1に異質な他者あるいは他者の持つ異論に対する寛容性を規定する要因を探ること、第2に、寛容性が持つ心理的意味を考察することである。

3. 研究の方法

6つの研究を行った。第1の目的のために、幼児から青年に対して予備調査を含めて4つの実験を行った。寛容性の測定方法は様々なものがあるが、本研究では、異質な他者との交流の側面、すなわち、そのような他者との交流を望むか、あるいはそのような他者を

仲間集団に受け入れるかということから測定した。規定する要因として、判断対象の領域(道徳、慣習、個人)、および年少者(幼児から小学3年生まで)に対しては相対主義の理解と心の理論を想定した。続いて第2の目的のために、大学生を対象に、2つの調査を行った。具体的には、寛容性が与える影響として社会的メリット(社会的ネットワークの規模)/心理的メリット(生活充実度)を想定し、その相関関係および影響関係を探った。寛容性は「意見が異なる他者に対する寛容性」と「迷惑行為をする他者に対する寛容性」の尺度によって測定された。

4. 研究成果

(1) 研究1(予備的調査)

6名の大学生を対象に、認知と感情がどのように寛容性にかかわるのかという基準の抽出を試みた。先行研究で使用された50の意見(例えば中絶、捕鯨など)に対して、どの意見に対し「許容できない」と感じるかどうかについて評定し、および各意見に対し感情や道徳・慣習の概念化などについて評定した。また、実際にどのような基準で「許容できるか否か」を判断したのかについてインタビューした。感情と道徳・慣習概念化の基準がみられたが、それ以外に判断者本人への影響可能性の見積もりも許容の判断において利用されることが示唆された。

(2) 研究2

(既に発表済みのものにデータを追加し再分析したものである)

小学4年生、6年生、中学2年生を対象に、集団からの排除についての判断を検討した。私的集団(遊び仲間集団)と公的集団(班)のそれぞれにおいて、社会的領域理論の3領域(道徳、慣習、個人)に対応した行動の特徴を持つ他者に対する排除判断(集団から排除することを認めるか)、その理由を求めた。その結果、年齢とともに、排除自体の不公平

性に注目し排除される他者の特徴を区別しない判断から、集団機能に注目し他者の特徴を細かく区別する判断へ変化した。小学生は2つの集団を区別して判断する一方で、他者は変わるべきであると考えられる傾向が見られた。同時に、提示された他者に対して「好ましい」「変だ」などの評価を求めたが、これらの評価自体に発達差はなかった。つまり、他者への評価（「好ましい」や「変だ」など）が判断における発達差と関係する可能性は低いと考えられる。

(3) 研究3～研究4

信念の多様性についての子どもの理解を探るために、異論を持つ他者への寛容性、相対主義の理解、心の理論の3つの関連を調べた。研究3では、幼児、小1生、小2生、小3生を対象に実験を行った（なお、小学生に対しては絵本形式の質問紙を利用し、集団で実施した）。実験の流れは次の通りである。まず、「道徳」、「事実」、「曖昧な事実」、「好み」の4領域に対応する意見についての本人の考えを確認した（たとえば「好み」は「アイスクリームは美味しい」）。その後、本人の考えと同じ子ども(A)、逆の考えの子ども(B)の2種の人物を提示し、「どちらの考えが正しいか、両方の考えが正しいか（相対主義の理解）」、「A、Bそれぞれが被験児に遊ぼうと言ったらどう思うか（寛容性）」を尋ねた。幼児については誤信念課題もあわせて実施した。その結果、幼児においても課題によっては相対主義の理解がみられた。また、どの年齢群も、領域を考慮して判断していたが、寛容性判断において加齢とともに道徳領域が分化していった。「好み」に対する相対主義の理解（アイスクリームが美味しいと考えても、美味しくないと考えても、どちらも間違っていない、という判断）がみられなかったのは、課題として提示されたアイスクリームのおいしさが子どもにとって絶対的なものだったからかもしれない。続く研究4で

は、子どもにとってあまり魅力的ではない食べ物(野菜)を材料にした補足実験を行った。その結果、「野菜」課題において相対主義理解の割合が増加した。

(4) 研究5～研究6

研究5では、大学生を対象に、寛容性を測定する尺度、生活充実度、友人ネットワークの形成についての質問紙調査を実施した。寛容性の高さ和生活充実度、友人ネットワーク形成に相関が見られ、寛容性と心理的健康との関連が示唆された。

続く研究6では、影響関係を特定するために、研究5で使用した尺度を用いて、パネル調査を実施した。2回目調査の生活充実度、「知人・友人・近所の人の人数」、「知人・友人・近所の人の中で手助けや手伝いをしてくれそうな人数」のそれぞれを従属変数、性別、1回目調査の寛容性（2種類）、一般的信頼感、対応変数（従属変数に対応する1回目の変数；生活充実、知人・友人・近所の人の人数、知人・友人・近所の人の中で手助けや手伝いをしてくれそうな人数）を独立変数とした分析モデルによる重回帰分析を行った（強制投入法）。このような分析方法を用いると、性別・一般的信頼感・対応変数の影響を除去し、寛容性が生活充実度と対人ネットワークに与える影響を検討することが可能になる。その結果、「意見の異なる他者に対する寛容性」の得点が高いことが、3ヶ月後の友人の増加に影響していた。寛容性は生活充実度には影響がなかった。これまで因果関係に踏み込んだ研究はなかったが、本研究は、寛容性が対人ネットワークの構築におよぼす影響を明らかにした。

(5) まとめと今後の課題

本研究の目的は、第1に他者が持つ異論に対する寛容性を規定する要因を探ること、第2に、寛容性が持つ心理的意味を考察することであった。幼児、児童、青年を対象とした実験から、寛容性は相対主義の理解の発達と

独立した発達過程であること、加齢とともに道徳領域の問題が重視されるようになることが示唆された。また、「意見の異なる他者に対する寛容性」が対人ネットワークの拡大に影響することが示された。

他者に対する寛容性は、単に「他者が異なる意見を持つことを理解すること」で達成されるものではないようだ。寛容性判断は、複数の知識を調整する複合的な過程であるという Killen ら(2006)の主張を支持する結果と考えられる。寛容の最も難しい問題は、道徳的問題と抵触するときに生じる。発達の到達点は、寛容であるかどうかという量的な基準ではなく、複数の観点を考慮して判断できるかということ、状況に応じて判断を変えることができること、抵触する問題の種類を考慮できるということではないだろうか。小学生は判断材料となる他者や異論自体の差異を十分に考慮できず、中学生は集団の差(本研究では公的集団か私的集団か)を比較的考慮しないという本研究から得られた知見は、年齢群によって教育的課題が異なることを示唆するものである。

また、寛容であることが集団の発展に寄与するという多くの指摘があるが、個々人にとっての利点はあまり検討されていなかった。本研究では、対人ネットワークの拡大と生活充実度という、社会的、心理的メリットへの影響関係をパネル調査で検討した。その結果、寛容であることが友人数の増加に影響することが示された。

本研究では、教育的な働きかけの効果を実験的に検証するにはいたらなかった。また、寛容の効用における発達差も検討できなかった。この領域の研究が少ないこと、特に日本においてはほとんど取り組まれていないことから、本研究のみではこれらの大きな問いに答えることは難しかった。これらは今後の課題として残されている。

<引用文献>

Killen, M., Margie, N.G., & Sinno, S. (2006). Morality in the context of intergroup relationships. In M. Killen & J. Smetana (Eds.). *Handbook of moral development*. (pp. 155-183). Mahwah, NJ: LEA.

5. 主な発表論文等

(雑誌論文)(計4本)

(1)長谷川真里 他者の多様性への寛容 - 児童と青年における集団からの排除についての判断 - 教育心理学研究 印刷中(査読有)

(2)長谷川真里・有馬斉・唐沢穰・高橋征仁・外山紀子 2013 道徳判断研究の最前線法と心理, 13, 82-86. (査読有)

(3)長谷川真里 2013 他者の多様性への寛容: 寛容がもたらす社会的・心理的意義の検討 横浜市立大学論叢人文科学系列 第64巻 第3号 209-214. (査読無)

(4)長谷川真里 2013 発達心理学において正義はどのように扱われてきたのか 法社会学 78, 144-153. (査読無)

(分担執筆)(計1本)

(1)長谷川真里 2013 社会性の諸問題 二宮克美・浮谷秀一・堀毛一也・安藤寿康・藤田主一・小塩真司・渡邊芳之(編) パーソナリティ心理学ハンドブック 福村出版 pp.267-273.

(学会発表)(計5本)

(1)長谷川真里 2013 道徳性発達と心の理論 日本発達心理学会 第24回大会発表論文集「道徳性・向社会性」分科会 ラウンドテーブルでの話題提供 p.42. 明治学院大学(3月16日)□□

(2)長谷川真里(企画) 2012 道徳判断研究の最前線 法と心理学会第13回大会ワークショップ 武蔵野美術大学□□

(3)長谷川真里 2012 子どもの道徳判断
研究の現状と問題点 2012 年度日本法社会
学会学術大会 企画関連ミニシンポジウム□
法と正義の心理学的基盤 京都女子大学 (5
月 12 日)

(4) Hasegawa, Mari 2013 Children's
thinking about diversity:Judgments of
relativism,tolerance,and theory of mind.
16th European Conference on
Developmental Psychology (Lausanne,CH).
ポスター発表□□ (査読有)

(5) Hasegawa, Mari 2012 Tolerance to
Diversity: The Judgment of Children and
Adolescents When Accepting Others to
Their In-groups. International Society for
the Study of Behavioural Development
2012 Biennial Meeting (Edmonton,CA). ポ
スター発表 (査読有)

6 . 研究組織

(1)研究代表者 長谷川真里 (横浜市立大学)
研究者番号 : 10376973